

# キャリア教育だより

研修部 キャリア形成連携 2022/09

前回は、「ライフキャリア」は日々の生活の中で、それぞれが自分の役割を果たしながら充実した生活を送ることが基本だというお話をしました。

以前から、知的障がい児教育の世界では「今、ここで」の教育という言葉が使われてきました。将来のことも大切だけど、今日この場での学びや生活が大切で、充実した毎日の先に豊かな生活があるという考えです。子どもにとって、毎日の学校生活が充実したものであることが重要だから、子どもたちにとっての「やりがい」とか「やってみたい」という思いを大切にしようというのです。このような考え方は、今のライフキャリア教育にピッタリなじむものだと思います。



ところで、子どもたちの家庭での生活はいかがでしょうか。家族の一員として、その家庭の子どもとして役割を果たせていますか？ その子のできることで、自分の身の回りのことに取り組んでいるでしょうか。一人では十分できなくても、大人が手伝うことで自分のできるところは自分でやろうとしているでしょうか。

「身辺自立」という言葉を、特に小学部の頃にはよく耳にするかと思います。この「自立」ということについてどんなイメージをおもちでしょうか。「自立」＝「自分の力だけでできる」だと思っている方はいませんか。多くの場合「自分の力だけでできる」が自立だと思うのかもしれませんが。「経済的自立」とか「社会的自立」などのように使われる「自立」はなおのことそうかもしれません。もし、そのように考えてしまうと、障がいの重い子どもたちは一生「自立」とは縁がないことになってしまうのではないかと心配になります。

そこで、「その人らしい自立」「その人なりの自立」について考えてみます。ここでの「自立」は、「自分のできることは精一杯果たし、足りないところは支援（援助）を受け成し遂げる」という自立です。全てを自分一人でやらなくともよい「自立」です。このように「自立」を考えると、99.9%の援助を受ける「自立」から、援助を受けることが限りなく0%に近い「自立」まで、スペクトラム（虹のよう）に様々な「自立」があると考えられます。このような「自立観」に立てば、どんな子にもその子なりの「自立」を考えることができます。そして、発達是可以が増えるだけでなく、「自立」に必要な援助が少しずつ減っていき、形が変わったりすることだと思えることができます。

かつて、重い障がいの子が、着替えのときにほんのわずか腰を浮かそうとする様子を見たことがあります。下着を脱がそうとする大人の動きに合わせて腰を浮かせることで、介助する大人の仕事を助ける動きでした。それも「その子なりの自立」の姿だったのだと思います。

ライフキャリアの立場をとるキャリア教育は「こうあらねばならない」とか「将来のために今を頑張る」というような堅いものではなく、「その人らしさ」を大切にすること、「一人一人のあり方は様々でその時によっても違うこと」を大切にすることです。（文責：研修部 小川征利）



※ 文中で使用しているイラストは「かわいいイラスト素材いらすとや」のものです